

## 力のありか、用い方

丸山 勉

[聖書] 士師記 16章 23～31節

ペリシテ人の領主たちは集まって、彼らの神ダゴンに盛大ないけにえをささげ、喜び祝って言った。「我々の神は敵サムソンを／我々の手に渡してくださった。」その民もまたサムソンを見て、彼らの神をたたえて言った。「わが国を荒らし、数多くの同胞を殺した敵を／我々の神は、我々の手に渡してくださった。」彼らは上機嫌になり、「サムソンを呼べ。見せ物にして楽しもう」と言い出した。こうしてサムソンは牢屋から呼び出され、笑いものにされた。柱の間に立たされたとき、サムソンは彼の手をつかんでいた若者に、「わたしを引いて、この建物を支えている柱に触らせてくれ。寄りかかりたい」と頼んだ。建物の中は男女でいっぱいであり、ペリシテの領主たちも皆、これに加わっていた。屋上にも三千人もの男女がいて、見せ物にされたサムソンを見ていた。サムソンは主に祈って言った。「わたしの神なる主よ。わたしを思い起こしてください。神よ、今一度だけわたしに力を与え、ペリシテ人に対してわたしの二つの目の復讐を一気にさせてください。」それからサムソンは、建物を支えている真ん中の二本を探りあて、一方に右手を、他方に左手をつけて柱にもたれかかった。そこでサムソンは、「わたしの命はペリシテ人と共に絶えればよい」と言って、力を込めて押した。建物は領主たちだけでなく、そこにいたすべての民の上に崩れ落ちた。彼がその死をもって殺した者は、生きている間に殺した者より多かった。彼の兄弟たち、家族の者たちが皆、下って来て、彼を引き取り、ツォルアとエシュタオルの間にある父マノアの墓に運び、そこに葬った。彼は二十年間、士師としてイスラエルを裁いた。

[序] サムソン物語は何を語っているか

旧約聖書の士師記について、その中のエフタについて、今月の前半で学び、少し間が空きましたけれども、今日は士師の中でもギデオンと並ぶほど印象的な、サムソンのことについてご一緒に聖書から見てまいりたいと思います。

サムソンは、とにかく人並み外れた怪力の持ち主であったと言う点で、聖書の中では比類のない人物です。今日はサムソン物語の最後の場面を読んで頂きましたけれども、三千人もの人が屋上にいる巨大な建物の柱を、その腕っぷしで押し倒し、その建物を崩壊させたと言うのですから。これは『サムソンとデリラ』という映画にもなりましたね。その他にも、素手でライオンを殺し、その皮を剥いだとか、ロバのあごの骨を振り回して、ペリシテ人を千人殺したとか、にわかには信じがたい力を持つ人物のことについて、士師記の13章から16章には記されています。

一体、この物語は私たちに何を語ろうとしているのでしょうか？様々な視点で読むことが出来ると思いますけれども、私は、この物語を通して、人間にとって「力」とは何なのかということを考えさせられました。

### [1] 信仰の立ち位置を教える物語

人は成長すると「力」をつけます。「力」そのものは、悪ではありません。それは人間が生きていくために備わっていくものだと思います。いつまでも赤ちゃんでいられません。独り立ちして行くための「力」はどうしても必要です。

けれども、近年頻繁に耳にするようになった言葉に、「パワー・ハラメント」(略してパワハラ)という言葉がありますね。これは、言ってみれば、後天的、或いは社会的な「力」を得たものが、適切でない「力」の用い方で、人に苦痛を与えるということですね。政治の世界で、教育の世界で、或いはスポーツの世界で、話題にならない日はないのではないかと思います。けれども、対岸の火事ではありませんよね。私たちの家庭でも、そして教会でも、権力的な力関係のようなものが築かれ、傷つく人が生まれてしまっているということが起こり得るのです。これは、教会の牧師は、特にそのことをよくよく肝に銘じていなければいけないと思います。

当たり前ですが、牧師であっても、弱い人間です。神様ではありません。けれども、私は、そう信じていますけれども、人間だからこそ、神様の力を頂いてここに立っています。立たされています。それが信仰に生きる原点だと思います。ここに集まっている人皆もそうではないでしょうか。「私」ではない、神様が、イエス様が私を捕えて下さって、私を本当の意味で生きるようにして下さいました。今私がこのようにあるのは、ただ神様の恵みだ。そう言えると思います。

私は、この士師記の、サムソンの物語は、そのような自分の信仰の立ち位置を教えてくれる、大変興味深い、含蓄に富んだ話ではないかと、今回じっくりと読む中で思わされました。

サムソンの生涯は、そのあらましを簡単に要約するとこのようなものです。

モーセやヨシュアといった指導者は世を去り、しかしまだイスラエルに王が立てられる前の時代、士師(さばきづかさ)と呼ばれる者がイスラエルを治めていました。サムソンという人は、御使いのお告げがあって、その母の胎内にいる時から、特別に神様にささげられたナジル人として生まれてきました。ナジル人は特別の誓願を立て、その誓願の間(サムソンは終身)は、神様の力の証として髪にかみそりをあてないことを守りました。

このサムソンは、イスラエルを苦しめるペリシテ人を相手に、単身で、驚異的な怪力で戦い、倒しました。しかし、彼が愛したデリラという女性の罠によってその髪を失い、それで神様から与えられた剛力を失い、ペリシテ人の手に落ちることになり

ます。足枷をはめられ、目もつぶされた彼は皆の見せ物となります。しかし、髪が再び伸びた時に、神様の力が戻り、多くのペリシテ人を、建物もろとも滅ぼし、自らも最期を遂げるという話です。

## [2] 「渴く」サムソン

なかなか壮絶な話です。私は先ほど、自分の信仰の立ち位置を教えてくれる話だ、と言いましたけれども、そのためにはまずは彼の出发点も見ておきたいと思います。それは、実は彼が体の「力」を持つ前、彼の意識が始まる前に、神様のご計画が進んでいた、ということです。13章にあります。サムソンが誕生する前に、彼の母親は神様の御使いを通して語られました。「あなたは身ごもって男の子を産む。その子は胎内にいるときから、ナジル人として神にささげられているので、その子の頭にかみそりを当ててはならない。彼は、ペリシテ人の手からイスラエルを解き放つ救いの先駆者となろう」(13:5)。つまり、彼は神様からの使命に生きるためにその命が与えられたのです。この事実が、彼が支えられている「確かさ」そのものなのです。

しかし、生まれてきたサムソン、ちょっと歯止めがきかないと言いますか、自分の感情をコントロールするのが苦手、また女性に弱いという一面を聖書は隠さずに述べています。かなり問題を感じる部分があります。そして、やる事なす事が、どうも幼稚っぽい気がします。「神様はどうしてこのような男を敢えて選ばれたのだろう」と率直に思います。けれども、もしかしたらそのように考える事自体が、間違っているのかもしれないと思いました。神様のご計画や、深い思い、それを自分の考えの中に閉じ込めてしまっていないだろうか？—聖書は言います。「言っておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことができになる」(マタイ 3:9) と。

サムソンは確かに手に負えない厄介な人物かもしれません。しかしそれでは、私たちはどうなのか。神様から見れば五十歩百歩なのではないでしょうか？けれども、後でも見てみますけれども、神様は一度「わたしが選んだ」という者を、どのような者であっても、決して見捨てることはなさらない方です。

それにしても、どうもサムソンを見ていると、「力」は怪力でも、その使い方はどうなのだろう？と思います。単純で思慮を欠いたような彼の行動の数々…。どうも、いたずらに自分の力を持て余し、それを使っているように思えてなりません。「力」というものは、それを意のままに使いたくなる誘惑といつもセットになっているものなのかもしれません。だからパウハラが起るのでしょうね。サムソンの傍にいた人たちは大変だったと思います。或いは、彼は周りから浮いていた、孤立していたかもしれませんね。

そのようなこともあったのでしょうか、彼はペリシテ人 1000 人を殺した後で、酷い「渴き」を覚えているのです。そして、神様に祈ったのですね。こうあります。

「彼は非常に喉が渇いていたので、主に祈って言った。「あなたはこの大なる勝利を、この僕の手によってお与えになりました。しかし今、わたしは喉が渇いて死にそうで、無割礼の者たちの手に落ちようとしています。」神はレヒのくぼんだ地を裂き、そこから水が湧き出るようにされた。彼はその水を飲んで元気を取り戻し、生き返った。」(15:18-19)

「渇き」と言うのは、虚しさとも言えるのではないのでしょうか。けれども、彼の中には「祈る」心、信仰の灯が残されていました。それは幸いなことだったと思います。

### [3] 神様の選びと召命は取り消されない

しかし、16章でも彼の弱さがもろに露呈します。自分が好きになった女性デリラを通しての罠に、まんまと嵌められてしまいます。スキがあり過ぎです。先ほどは真剣に祈ったのに、それでしっかり方向転換出来たわけではなかったのですね。デリラは、かなりあからさまに、サムソンに、彼の力の根源を聞き出そうとしています。「あなたの怪力がどこに秘められているのか、教えてください。あなたを縛り上げて苦しめるにはどうすればいいのでしょうか」(16:6)。サムソンは、誘惑してくるデリラを三度欺くのですけれども、とうとうその後に「あなたは私を愛してなどいないのね」ということを言われると、彼はそれに耐え切れずに打ち明けてしまったというのです。

そのあとは、この計画を練ったペリシテ人は、してやったりと言わんばかりに、デリラのひざで寝ているサムソンの髪の毛を切り、そして彼の剛力は抜けてゆき、彼は捕えられ、目を潰され、足枷をはめられ、牢で臼をひく、奴隷の仕事をする存在となりました。サムソンはもう全く力のない存在です。いや、それどころか人間というのは残酷ですね。このような、これまで、ただ強力な力の上に立ち、それを振るってきた者が落ちぶれると、周りの者たちはそれを面白がるのです。彼は見せ物として笑い者とされました。言ってみれば彼はドン底を経験したのです。けれども、そこで彼は自分の原点に立ち返らされたのではないのでしょうか？

先の15章で、サムソンが語った、とても象徴的な言葉があります。デリラに言い寄られた時、彼は何回となく「～～したなら、わたしの力は抜けて、わたしは弱くなり、並の人間のようにになってしまう」と言っています。聞き捨てなりません。「並の人間のようになる」と。逆に言うと、自分は特別な存在だ、と。サムソンは、自分の「力」を誇り、その上に立って生きてきたのだと思います。

けれども、神様はサムソンをそのままにはされませんでした。これまで力を誇ってきた人間を、徹底的に「弱く」されることへと導かれたのだと思います。かなりの荒療治です。あったはずの「力」が消えました。それどころか、足枷で自由に歩けなくなり、両目も潰され、そのことによって目の欲望も取り去られました。けれど目が見えなくなったので、聴くことに集中できたのではないのでしょうか。「聴く」。神様の言葉を、この時に至って、新鮮に聴くことが出来るように導かれたのではないかと思います。

この時、彼の髪の毛はもう一度伸び始めていたのです。22節にそう書いてあります。ここは大事だと思います。神様はサムソンが気付く前から、彼を選んでいた。その神様の選びと召命は、サムソンの不信仰や自己中心にも関わらず、取り消されることはない！ということです。それが証拠に、神様の力を示す髪の毛が再び伸びてきました。これは、神様の憐れみそのものではないでしょうか！

そして、「わたしがわたしの計画のために選んだサムソンよ、今、あなたが出来ることは何なのか？」—そのような語りかけを聴いたのではないのでしょうか、サムソンは、28節で、文字通り命を注ぎだす祈りを神様にしています。

「わたしの神なる主よ。わたしを思い起こしてください。神よ、今一度だけわたしに力を与え、ペリシテ人に対してわたしの二つの目の復讐を一気にさせてください。」

「もう一度だけ、わたしに力を下さい」と。ここでの「力」は最早いたずらに用いる力ではありませんね。神様は、40年間ペリシテに虐げられていたイスラエルを救うというご計画をお持ちでした。そのためには、神様は大胆です。この破天荒なサムソンを用いる、とプランされた。そして今、サムソン自身が、神様が、イスラエルをお救いになる、そのご計画のために、この私の命をも用いて下さいという、正に献身の祈りを捧げたのですね。彼は、自らの「力」のありがたが、ただ神様から来るものであることを、この時喜びを持って知ったのではないのでしょうか。だから彼は、その「力」を、神様にお返しするようにして神様のために捧げ切ったのではないかと思います。

#### [結] 「力」は弱さの中でこそ十分に発揮される

サムソンが「怪力サムソン」のままであつたら、全くと言って良い程、私たちへのメッセージは無いと思います。けれども、サムソンは本当に弱くされた時に、本当に「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」(コリント二 12:9)という主の恵みを知ったと言えるのではないのでしょうか。

先週ご紹介させて頂いた、小山京子さんの「コラム」にも、この聖句が引用されていましたね。ウイルス性結膜炎になり、「これでは聖書も読めないではないですか！」と苛立ちと不安の中で神様に祈った時に、神様は「お料理を作ってください」と示して下さいました。気持ちが次第に変えられてきた。ライトを点ければ聖書も読めるようになってきて嬉しい。ゆっくり御言葉を読んで、書きとめるようにしています、と書かれていましたね。—私たちは、「弱さ」の底に立たないと見えてこない主の恵みがあるのだと思います。けれど、そこに立った時に、自分は独りでこの人生を歩んでいるのではない、ということに気付かされるのではないのでしょうか。

十字架の主イエスが私たちの人生に同伴されています。神の独り子でありながら、驚くべきことに、その「力」を捨てて、私たち罪人をどこまでも愛し、連帯して生きる事をお選びになったお方は、「きのうも今日も、また、永遠に変わることがない」お方

です（ヘブライ 13:8）。サムソンではないですが、このイエス様は、ご自分の命を投げ出されて、私たちを、ペリシテ人よりももっとも強力な悪の霊に打ち勝って下さり、およみがえり下さったお方です。このお方の愛を受け取る時に、私たちは、この世の中の相対的な「力」の構造の上ではなく、それに縛られずに、神様に聴き、喜んで仕えていく、そんなしなやかな生き方へと、きっと聖霊が、日々私たちを造り変えて下さるに違いないと思います。ちょうどサムソンの人生を神様が取り扱われたように。

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、今日もご一緒にあなたの御言葉に聴くことが許されて感謝致します。

私たちは皆あなたによって造られた者です。しかし、気がつくとそのことを忘れ、丸で自分が主、神であるかのように傲慢な振る舞いを、いえ、行いに現われなくても、心の中で高ぶる思いを抱き、あなたと隣人に対して罪を犯し続ける者であります。そのことに気付かせて下さって感謝致します。

十字架の主よ、どうかあなたの前にぬかずき、あなたが下さる真の赦しの中を生きるようにしてください。おのれの「力」を捨て、聖霊が下さる「愛の力」の中でこの一週間も歩むことが出来ますよう、導いてください。

私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。

アーメン。